

会員だより

新酒「富田 酒蔵見学」

けささんと のめや

あやめの とんたさけ

今朝たんと飲めや

「あやめ」の富田酒

この句を口にするだけでほんのり良い気分になりそうです。この句は芭蕉の弟子、宝井其角がこの地を訪れ、気分を良くして詠んだ句です。前後どちらから読んでも同音になり、あやめの季語も入った立派な回文俳句で、特に当時の富田一の豪商紅屋の酒は江戸まで知られた銘酒になりました。

「けささんと会」はこの句を記念して、地元酒造を応援する会です。私達は2月3日、「けささんと会 酒蔵見学」に参加しました。

はじめに三輪神社でお祓いを受けて身心共に清くしてもらいます。

その後、国乃長(寿酒造)清鶴(清鶴酒造)の蔵元へ

二組に分かれての見学です。私達は紅屋の流れを汲む造り酒屋清鶴酒造に案内して頂きました。

若社長さんが蔵の屋根や板塀の説明をされ、その

古さに感嘆の声が上がりました。



見学は食品工場用帽子で

中に入るとお米や水の話、米麴の味みまでさせて頂きました。お米と麴をまぜ、沢山並んだ長テールブルの上で醗酵状態を見ながら、手間暇を惜しまず、現在でも全量袋しぼりにこだわり、上に重い押しをかけて新酒と酒粕に分ける工程も、実際に見ることが出来ました。その後、数々の新酒の試飲をさせて頂きました。



酒蔵内は薄暗く冷え冷え新酒の試飲が美味しい！！

お蔵内はしんしんと冷えていましたので、殿方はピッチが速くすぐに顔色が赤くなり、女性は何よりも有り難く温かい甘酒に行列ができました。帰りに各自お気に入りを入りを注文し、その上にお土産に新酒と酒粕も頂いて大満足の見学会でした。

記・写真・中川加奈子

この木、なんの木？

気になる木

昨年(平成29年)11月、カメラマンの岩崎さんの案内で京都植物園を散策しました。

その時に気になったのが、説明の中で、樹木は水圧の関係で125mが限度といわれました。

約30年前に亡くなった義父が人間は、125才まで生きられるんだよと言っていました。101才余でこの世を去りました。

私にとってこの125という数字が不思議な数字でした。

散策中「世界で1番高い樹は？」の質問もでていましたので調べてみました。今の処、1番高いのは米国カリフォルニア州の「セコ

イア」で115.5mで、写真では、近くには近づけないような森が広がっています。日本で1番高い樹は京都花背の三本杉でこれ等の幹の下部がくっついて、お互い支えあい、高い樹が育つたようです。



「カーテンフィグツリー」というイチジクの樹

昔の私なら、それを聞けばすぐに探しに行ったんですが、今は、この目で確かめられず残念です。ちなみに京都植物園の1番高い樹は5年前の調査で、約25mのクスノキとありましたが、その後、他の木が抜いたかも知れません。

何しろ最近のドローンの開発で、正確な測量が可能になりました。その為に各地の有名木が塗り替えられ、最高の座を奪われた地域振興に戸惑っている所があるようです。木に罪はないのにかわいそうです。クスノキは樹皮にフシダニを住まわせ、他の悪いダニを来ないようにしたたり、枯れ枝だけでなく、生枝も落として、台風などが来ると無駄な抵抗を減らすのに役立つそうです。でもこんな木もある

四季彩 ヤマボウシ

山中に普通に生え、あたかも白い花が咲いているように見えるが、花卉ではなく4枚の総苞片がひらひらと風に揺れているのである。

街路樹、庭園や公園でも良くもちいられているが、赤い甘い果実になると鳥がついばむので、数少なくなってしまう。

近縁にハナミズキ(アメリカヤマボウシ)があるが、どんぐりのようなのがった個々の果実や花卉の丸みの違いがある。清水コミセンの近くの庭にあるヤマボウシの赤い実を待ちかねていたのに数個しか残らなかった。

がっかりしていたら京都植物園の駅前の街路樹のヤマボウシの樹一杯に赤い実をつけていたので驚いた。

これだけたくさん実がなると鳥も食べきれなかったのかな。それとも植物園の中にはもって美味しい実が沢山あったのかも知れない。

記・写真：上村サト子



ヤマボウシの花



ヤマボウシの実



京都植物園前の街路樹ヤマボウシの実が鈴なり

るんです。オーストラリア・ケアンズ近くにある「カーテンフィグツリー」というイチジクの樹齢約500年の木です。鳥に運ばれたイチジクの種が木の上で芽を出し、自分が生き残らんがために、地上に向けて根を下ろし、ついに親木を枯らしてしまつたものです。別名「しめ殺しの木」またの名「聖堂の樹」とも。どちらも納得できる別名で大変な観光客を呼んでいます。人間の生き方みたいですよ。

記・写真・上村サト子